ゴジャール・ワヒー語の使役表現[1)]

吉枝　聡子

はじめに
１．形態的使役文
２．迂言的使役文
結び

はじめに

ゴジャール・ワヒー語[2)]の使役表現には，使役派生接辞の接続による形態的使役文と，動詞の不定詞と補助動詞による迂言的使役文の二種類がある。形態的使役では，自動詞または他動詞の現在語幹に使役派生接尾辞-ʉv[3)]（不定詞形は-ʉvn)を付加して使役動詞を形成する。[rʉx̌ʉp-「眠る」＞rʉx̌ʉpʉv-「眠らせる」，pev-「飲む」＞ pevʉv-「飲ませる」]。この使役接尾辞-ʉv は全ての動詞に接続できるわけではなく，動詞によっては使役動詞をもたないものがある。迂言的使役は，自動詞または他動詞の不定詞＋補助動詞 rmeyn[4)]「～させる」によって表される。迂言的使役文は形態的使役文に比べて生産性が高く，ほぼ全ての動詞から作ることができる。

近年の言語類型論では，使役(causative)を動詞のもつ項構造の変化に関わる文法的手続きの一環としてとらえ，使役者(causer)項の増加とそれに付随する本来の動作主語→対応する形式への降格，および関連する結合価階層の考察，という枠組みで扱われる。ゴジャール・ワヒー語の使役文では，元となる非使役文の直接目的語が使役文でも保持され，被使役者は使役文のタイプによって，直接目的語または属格，または例外的に与格に立つ。これは，Dixon(2000)の分類では v)―非使役文で他動詞の目的語が使役文で保持され，被使役者は結合価の階層に従って適用される―のタイプに属する。ただし，この言語では使役文で保持されるはずの直接目的語と使役者は，同言語が分裂能格（現在時制で主格・対格構文，過去時制では能格構文）をとるため，実際の使役文では時制によって異なる格として実現されることになる[5)]。さらに，ゴジャール・ワヒー語の使役文では，使役者(A)，直接目的語(O)，被使役者(causee, X1)，それに使役仲介者(X2)までの要素を，前置詞句等の付加詞や補文を添えずに格変化のみで表す。つまり，一部の動詞に限定した例外的用法を含めると，最大で「A が X2 をして X1 に O を～させる」という文を付加詞を用いずに表すことが可能である。このため，ゴジャール・ワヒー語の使役文では，使い分けの煩雑さや，通常の使役化の手続きから外れた使用上の乱れなどの問題点が認め

られる。例えば，これらの使役文の用法上，特に複雑さを引き起こす大きな要因となっているものは以下の２点である。

①使役文のタイプによって奪格の表す要素が異なる。

奪格は被使役者および使役仲介者の両方を表示し，使役文の種類によって表示される要素が異なる。

A　wuz-eš　　x̌ʉynanen　　čmos　　ṣanduvem

私+SUF(PROG) 女性 PL.ABL　杏ﾍﾟｰｽﾄ ACC　こねる CAUS.PAST.ST

「私は女性たちに杏ペーストをこねさせる」

B　maẓe　　qorbonen　　ferasater　　luqpar　　pemtsovd

私 ERG　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ABL　ﾌｪﾗｰｻﾄ DAT　服 OBL2　着る CAUS.PAST.ST

「私はゴルバーンをしてフェラーサトに服を着させた」

A の文では，奪格は被使役者，すなわち派生元の他動詞「こねる」の動作主を表すが，B の文では，同じ奪格が使役の仲介者を示している。このように，ゴジャール・ワヒー語では，使役文にタイプによって奪格で表される要素に違いが生じ，実際の使用に混乱がみられる。

②迂言的使役文において，本来不要な使役派生接辞の挿入が認められ，使役文のタイプによってその有意義性にゆれが見られる。

以下の二組の文例のうち，A と B は構造上正しい迂言的使役文，A'と B'は埋め込みの不定詞部分に，本来は不要な使役派生接辞-ʉv が挿入された文である。

A　maẓe　　anitaen　　ya　　zav　　gizn　　remet

私 ERG　ｱﾆﾀ ABL　その　赤ん坊 OBL2　起きる INF　rmeyn PAST.ST

A'　maẓe　　anitaen　　ya　　zav　　<u>gizʉvn</u>　　remet

私 ERG　ｱﾆﾀ ABL　その　赤ん坊 OBL2　起きる CAUS.INF rmeyn PAST.ST

B　maẓe　　rahimen　　ya　　serk　　makn　　remet

私 ERG ﾗﾋｰﾑ ABL その　杏の種 OBL2　噛み砕く CAUS.INF　rmeyn PAST.ST

B'　maẓe　　rahimen　　ya　　serk　　<u>makʉvn</u>　　remet

私 ERG ﾗﾋｰﾑ ABL その　杏の種 OBL2　噛み砕く CAUS.INF　rmeyn PAST.ST

A/A'は，接辞の有無にかかわらず，どちらの文も「私はアニタにその赤ん坊を起こさせた」となるのに対し，B/B'は，使役接辞の有無により，「私はラヒームに杏の種を噛み砕かせた」と「私はラヒームをして（誰かに）杏の種を噛み砕かせた」の意味となり，文意が異なる。つまり，使役文の種類によって，本来は不要なはずの使役接辞が，何らかの機能を持つ場合と，単なる余剰として用いられる場合がある。

ゴジャール・ワヒー語の使役表現に関しては，Lorimer（1958）で使役派生接辞-ʉv を用いた形態的使役文の存在については触れられているが，文例はわずかであり，不定詞＋rmeyn による迂言的用法についてはほとんど述べられていない。また Bashir(2009)では使役派生接辞-ʉv の存在と迂言的使役文の基本構造については言及されているが，実際の用法に関する記述はほとんどない[6]。このように，ゴジャール・ワヒー語の使役文では，その使用状況や問題点の所在について，整理すらされていない。

一方で，上にあげた，使役文の構造上の複雑さや使用上の混乱をはじめとする問題点には，使役文研究で現在主流となっている，項増加に関わる使役化メカニズム分析の立場から解明できるものも少なくないと思われる。以上の点をふまえ，本稿は，ゴジャール・ワヒー語について，1)使役表現の構造とその使用現状を概観し，2)確認されている用法上の問題点のうち特に上記の２点を中心に，使役表現をめぐる言語類型論的枠組みから考察することを目的とする。

なお，本稿では，「使役」は，日本語の「使役」で含意される，使役者と非使役動作者との関連性からみた「使役」でなく，causative の訳語として用いる。また，使役表現における，使役主体(causer)を A，使役の受け手(causee)を被使役者または X1，使役仲介者を X2，直接目的語を O で表記する。また，使役仲介者が存在する使役文を日本語で表すと曖昧性が生じることがあるため，ワヒー語文に対する日本語訳では「X2 に」等でなく「X2 をして」を用いる。

ワヒー語の音韻体系およびその表記方式の詳細については Yoshie（2005a）を参照されたい。

1.　形態的使役表現

1.1. 自動詞

現在までに確認されているゴジャール・ワヒー語の自動詞 148 語のうち，使役派生接辞の付加が可能なものは 111 語である。自動詞派生の使役動詞では，派生元の自動詞が有情物（意志性がある）を主体とする場合，いわゆる狭義の使役「～させる」的な意味合いが強くなる。また，使役文に奪格[7]を加えると，さらに使役仲介者が存在することを表す。

1)　rahim-eš　　ya　yupke　člapʉvd
　ﾗﾋｰﾑ+SUF(PROG)　その　水 ACC　こぼれる CAUS.PAST.ST
　「ラヒームはその水をこぼしている」

2)　ya　wuške　ta　nan　pʉrδʉv!
　あの　子牛 ACC　～に PREP　母親　乳を出す気になる CAUS.IMPR
　「あの子牛を母（牛）に見せ（て，乳を出させ）ろ」

3) maẓe　　x̌e　　petr　　rox̌povd
私 ERG　自身　息子 OBL2　眠る CAUS.PAST.ST
「私は自分の息子を眠らせた」

4) maẓe　　rahimen　　ẓe　　petr　　rox̌povd
私 ERG　ﾗﾋｰﾑ ABL　私 GEN　息子 OBL2 眠る CAUS.PAST.ST
「私はラヒームをして息子を眠らせた」

1.2. 他動詞

他動詞 163 例のうち，使役派生が可能な動詞は 51 例である。他動詞派生の使役動詞では，そもそも他動詞に増項機能をもつ使役接辞-ʉv が接続するため，通常は「X に～させる」という狭義の使役の意味となることが予測される。しかしながら，ゴジャール・ワヒー語の他動詞派生の使役動詞では，一部の動詞で，使役動詞および派生元他動詞と同一の意味で用いられるものが認められる。

他動詞による形態的使役文は，被使役者(X1)を表示する格のタイプによって，以下のように分類できる。

1.2.1. 被使役者に奪格をとるもの

「A が X1 に O を V させる」という狭義の使役的な意味をもつ，最も一般的なタイプである。この種の動詞を用いた使役文では，奪格は被使役者(X1)を表示する。

5) maẓe　　ʦamen　　darxost　　nivišovd
私 ERG　これ ABL　申請書 OBL2　書く CAUS.PAST.ST
「私はこの人に申請書を書かせた・書いてもらった」[8)]

奪格に立つ被使役者(X1)は省略することも可能だが，この場合でも「書く」の動作主は「私」でなく，別の人物であることを含意する。

6) maẓe　　darxost　　nivišovd
私 ERG　申請書 OBL2　書く CAUS.PAST.ST
「私は（誰かに）申請書を書かせた・書いてもらった」

7) maẓe　　x̌e　　ɣiṣ̌　　perkelovd
私 ERG　自分 GEN　耳 OBL2　掻く CAUS.PAST.ST
「私は（誰かに）耳を掻かせた・掻いてもらった」（自分で掻いたのではない）

1.2.2. 被使役者に与格をとるもの

このタイプの使役文に含まれる動詞は，「A が X1 に O を食べさせる」のように，被使役者が何らかの利益を受けると考えられる，いわゆる受益動詞である。被使役者は必ず有生物となり，与格-er で表される[9]。

これらの文で用いられる奪格は，上の使役動詞とは異なり，使役仲介者(X2)を表示する。この場合，使役主体(A)，被使役者(X1)にさらに仲介者(X2)が加わった，「A(nom/erg)が X2(abl)をして X1(dat)に O(acc/obl2)を～させる」を表すことができる。奪格が示されない場合は，使役仲介者あり（省略されている）・なしの両方を予測する（通常は「仲介者なし」の方を予測）。このタイプに属する動詞はそれほど多くなく，現在のところ以下の 8 例が同様の使役文構造をとる。

qor-「飲む」＞qorʉv-「飲ませる」
yau-「食べる」＞yiwʉv-「食べさせる」
kušʉy-「聞く」＞kušyʉv-「聞かせる」
nežɣer-「飲み込む」＞nežɣerʉv-「飲み込ませる」
pəmeʦ-「着る」＞pəmʦʉv-「着せる」
θap-「舐める」＞θapʉv-「舐めさせる」
pev-「飲む」＞pevʉv-「飲ませる」
petfer-「ほおばる」＞petferʉv-「食べさせる，ほおばらせる」

8) wuz　rahimer　šapik　yiwvem　「私はラヒームにご飯を食べさせる」
私 NOM ﾗﾋｰﾑ DAT 食事 ACC　食べる CAUS.PRES.1SG
9) maže　rahimer　šapik　yowovd　「私はラヒームにご飯を食べさせた」
私 ERG ﾗﾋｰﾑ DAT 食事 OBL2 食べる CAUS.PAST.ST
10) maže　ʦ　qorbonen　rahimer　šapik　yowovd
私 ERG ～から PREP ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ABL ﾗﾋｰﾑ DAT 食事 OBL2　食べる CAUS.PAST.ST
「私はゴルバーンをしてラヒームにご飯を食べさせた」

＊受益動詞以外で与格をとる場合

数は限られているが，派生元の他動詞が間接目的語をもつ３項動詞である場合も，使役文で与格が用いられる。ただし，この与格は受益動詞とは異なり，派生元の間接目的語が使役文でもそのまま保たれたもので，元の非使役文の動作主(X1)から降格されたものではない。この使役文における被使役者(X1)は奪格で表される。

11) maẓe rahimen ya kupitver žaw ẓeδovd
私 ERG ﾗﾋｰﾑ ABL その 鳩 PL.DAT 穀物の種子 OBL2 撒く CAUS.PAST.ST
「私はラヒームに，その鳩たちに（対して）種を撒かせた」

1.2.3. その他の格をとるもの

joyʉv-「学ばせる：教える」では，被使役者に与格（または奪格）をとることが予測されるが，例外的に対格をとる。この場合，ゴジャール・ワヒー語では本来許容されない二重目的語が生じる。

12) ferasat-eš yowe anglezi joyʉvd
ﾌｪﾗｰｻﾄ NOM+SUF(PROG) 彼 ACC 英語 ACC 学ぶ CAUS.PRES.3SG
「フェラーサトは彼に英語を学ばせている；教えている」

この使役文に奪格を加えた場合は，受益動詞とは異なり，使役動詞の仲介者(X2)を含意する。

13) maže ferasaten ya šogerdev urdu joyovd
私 ERG ﾌｪﾗｰｻﾄ ABL その 生徒 PL.OBL2 ｳﾙﾄﾞｩｰ語 OBL2 学ぶ CAUS.PAST.ST
「私はフェラーサトをして生徒達にウルドゥー語を学ばせた」
（＝フェラーサトに生徒達にウルドゥー語を教えさせた）」

1.2.4. 狭義の使役動詞または他動詞として機能するもの

すでに述べたように，使役派生接辞-ʉv は，他動詞の主語を使役文では直接目的語に降格させ，使役主体として新たな項を増やす機能をもつ。従って，他動詞に-ʉv を付加した使役動詞は，狭義の使役「～させる」を表すのが一般的である。しかしながら，ゴジャール・ワヒー語の他動詞派生の使役動詞には，構造上は使役構文をとるにもかかわらず，使役「X に O を～させる」の意味に加えて，派生元の他動詞と同一の意味「A が O を～する」を持つものが少なからず認められる。

例えば，δits-「搾る」に使役派生接辞-ʉv を加えた以下の文

14) anitae ya ɣʉw ditsovd
ｱﾆﾀ ERG その 牛 OBL2 搾る CAUS.PAST.ST

では，

a.「Anita はその牛の乳を搾った」

b.「Anita は（誰かに）その牛の乳を搾らせた」

の両方の解釈が可能になる。

つまり，b.は通常予測される使役文タイプであるが，a.は，派生元の他動詞 δitsn「搾る」を用いた次の文

15) anitae　ya　ɣɯw　δitst「アニタはその牛の乳を搾った」
　ｱﾆﾀ ERG その 牛 OBL2 搾る PAST.ST

と同一の意味になる。「（誰かに）搾らせる」の意味であることを明確に表す際には，

16) ẓe　nane　ʦe　anitaen　ya　ɣɯw　ditsovd
　私 GEN 母親 ERG～から PREP ｱﾆﾀ ABL その 牛 OBL2 搾る CAUS.PAST.ST
「私の母はアニタにその牛の乳を搾らせた」

のように，奪格を添えて被使役者を明示する必要がある。

類似の例を見てみる。

petex̌-「（煙の上に）かざして清める」＞petex̌ɯv-

17) rahime　ya　zman　petx̌ovd
　ﾗﾋｰﾑ ERG その 子供 OBL2 清める CAUS.PAST.ST

は，

a.「ラヒームはその子供を清めた」（ラヒームが直接子供を煙の上にかざした）

b.「ラヒームはその子供を（誰かに）清めさせた」（別の人に子供を煙の上にかざさせた，かざしてもらった）

の二通りの解釈が可能であり，a.の文は，派生元の他動詞 ptex̌n を用いた

18) rahime　ya　zman　peteɣd
　ﾗﾋｰﾑ ERG その 子供 OBL2 清める PAST.ST

と同義である。奪格によって被使役者を表示した文

19) rahime　xalifaen　x̌e　zmanev　petx̌ovd
　ﾗﾋｰﾑ ERG 聖職者 ABL 自身 GEN 子供 PL.OBL2 清める CAUS.PAST.ST
「ラヒームは聖職者に自分の子供達を煙の上で清めてもらった」

であれば，使役の意味が明確に示される。

このタイプの動詞では，構造上は-ɯv による使役化のプロセスを経ているが，例文に対して a.で示した解釈では-ɯv の使役派生機能が反映されていないことになる。使役文中で被使役者(X1)または使役仲介者(X2)が省略され，使役動詞のみが用いられる現象は通言語的に広く見られることであるが，この場合でも使役動詞が使役自体の意味を失うことは考えにくい。このような現象は，類似の構造をもつ動詞の数が少なければ，限られた動詞がもつ個体差として分析することもできよう。しかしゴジャール・ワヒー語では，使役派生が可能な動詞 51 例のうち，インフォーマントによって判断が分かれるものも含め，実に半数以上の 32 例の動詞[10)]において，

上のような「見かけ上の使役文（実は通常の他動詞文）」の機能をもつ例が認められる。

このような，一部の使役動詞に見られる意味上のゆれは，言語類型論的に見ても非常に興味深い現象といえるが，この種の使役文は表面上は使役文構造をとるため，本稿が目的とする，使役化メカニズムの観点による分析では解明することができない。本稿では，使役動詞に確認される用法上の乱れとして提示するにとどめ，その考察については機会をあらためることとする。

1.3. 形態的使役：まとめ

以上に提示した用例から，ゴジャール・ワヒー語の形態的使役文の構造は概ね以下のようにまとめられる。構造を分かりやすくするため，派生元動詞からの使役化の手続きを併せて示す。なお，例文中では使役に直接関与しない，接辞等の諸要素は省略する。

1)自動詞

派生元の非使役動詞文の主体（被使役者, X1）は使役文では直接目的語へ降格し，新たな使役者(A)の項が加わる。

	yazn	lakt「皮袋が揺れる」	
	皮袋 NOM	揺れる PRES.3SG.	
→	rahim	yazne	lakʉvd
	ﾗﾋｰﾑ NOM	皮袋 ACC	揺れる CAUS.PRES.3SG
	「ラヒームは皮袋を揺する」		

上の使役文に使役仲介者項を増やす場合には，奪格を用いる。

rahim	qorbonen	yazne	lakʉvd
ﾗﾋｰﾑ NOM	ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ABL	皮袋 ACC	揺する CAUS.PRES.3SG
「ラヒームはゴルバーンをしてその皮袋を揺すらせる」			

2)他動詞

非使役動詞の直接目的語は，使役文でもそのまま保持され直接目的語に入る。被使役者(＝被使役動詞の主体）は，使役文ではすでに直接目的語があり，ゴジャール・ワヒー語では直接目的語の重複は通常許容されないため，さらに降格されて奪格に立つ。

rahim	darxost	nivišt
ﾗﾋｰﾑ NOM	申請書 ACC	書く PRES.3SG
「ラヒームが申請書を書く」		

→ wuz　rahimen　darxost　nivišʉvem

私 NOM　ﾗﾋｰﾑ ABL　申請書 ACC　書く CAUS.PRES.1SG

「私はラヒームに申請書を書かせる」

＊受益動詞の使役文では，被使役者(X1)は奪格で示されるところ，より受益性に関連の深い与格をとる。

rahim　şapik　yit

ﾗﾋｰﾑ NOM　ご飯 ACC　食べる PRES.3SG

「ラヒームはご飯を食べる」

→ wuz　rahimer　şapik　yiwvem

私 NOM　ﾗﾋｰﾑ DAT　ご飯 ACC　食べる CAUS.PRES.1SG

「私はラヒームにご飯を食べさせる」

上の使役文でもまた，奪格で実現されるべきスロットが空くことになる。このため，受益動詞の使役文については，さらに，奪格を加えて使役仲介者(X2)を表示することが可能となる。

wuz　qorbonen　rahimer　şapik　yiwvem

私 NOM　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ABL　ﾗﾋｰﾑ DAT　ご飯 ACC　食べる CAUS.PRES.1SG

「私はゴルバーンをしてラヒームにご飯を食べさせる」

＊非使役動詞が間接目的語を持つ３項動詞の場合は，直接目的語および間接目的語の両方が保持される。この文では，受益動詞にみられる非使役動詞の主語(X1)→与格の降格の手続きが行われないため，与格は被使役者(X1)を表さない。

wuz　ya kupitver　žaw　ẓeδem

私 ERG　その　鳩 PL.DAT　穀物の種子 ACC　撒く PRES.1SG

「私はあの鳩たちに種を蒔く」

→ maẓe　rahimen　ya kupitver　žaw　ẓeδʉvem

私 ERG　ﾗﾋｰﾑ ABL その鳩 PL.DAT　穀物の種子 ACC　撒く CAUS.PRES.1SG

「私はラヒームをしてその鳩たちに種を撒かせる」

なお，ここでも，使役文の構造上は奪格が入るべき項スロットが空いていることは受益動詞文と変わりない。このため受益動詞文と同様に，奪格で表示した使役仲介者(X2)を加えることが可能である。

3)使役文に関わる項階層

1)2)の結果，他動詞派生の使役文では，　奪格は，自動詞文および他動詞の一部（受益動詞・

３項動詞）では使役仲介者(X2)，それ以外の他動詞文では被使役者(X1)を表すことになる。これを含めて，上で提示した，使役化に見られる項増加・格要素の降格に至る一連の手続きをまとめると，ゴジャール・ワヒー語では，被使役者が実現される要素について，次のような階層を設定することが可能である。

主語＞直接目的語＞斜格目的語（あるいは斜格的補語）

ここでの「斜格」は，過去時制の能格構文に現れるそれとは異なることを注記しておく。この階層は Comrie（1981,1989）のいう使役に関わる項階層［主語＞直接目的語＞斜格目的語］に概ね一致するが，間接目的語の扱いが異なる。そもそもこの言語の使役文では与格の使用は受益動詞に限定され，与格と奪格の出現は相補的であることから，与格と奪格に階層性を認めず，共に斜格目的語グループに含めるのが妥当と思われる。

2. 迂言的使役表現

動詞の不定詞と rmeyn から成る迂言的使役文は，基本的に全ての動詞について形成することができる。ただし，動詞のもつ意味によっては，実際には用いられないものや，形態的使役文と使い分けがなされている例も認められる。また，一部の動詞では，不定詞部分に本来必要のない使役派生接辞-ʉv が挿入され，使役文の種類によって，挿入された接辞の働きが異なる現象が認められる。

2.1. 自動詞＋rmeyn

2.1.1. 使役動詞をもたない自動詞

使役動詞をもたない自動詞では，迂言的方法が使役を表すための唯一の手段であり，使役者(A) あるいは被使役者(X1)の意志性等には顧慮がおかれず，「X に O の動作を行わせる」という中立的な使役の意味合いのみを表す。強制使役や許可使役などのニュアンスは，zuriɣen「無理に」ijozaten「許可によって」等の付加詞や補文を添えて表す。

20) rahime　　qorbon　　zʉmbʉyn　　remet
　ﾗﾋｰﾑ ERG　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ OBL2　あくびをする INF　rmeyn PAST.ST
　「ラヒームはゴルバーンにあくびをさせた」

使役仲介者(X2)を表す際は奪格を添える。

21) maʒe　　rahimen　　qorbon　　zʉmbʉyn　　remet
　私 ERG　ﾗﾋｰﾑ ABL　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ OBL2　あくびをする INF　rmeyn PAST.ST
　「私はラヒームをしてゴルバーンにあくびをさせた」

2.1.2. 使役動詞をもつ自動詞

使役動詞をもつ自動詞の場合も，迂言的使役表現の基本の作り方は 2.1.1.と同様である。

22) wuz-eṣ　rahime　gefsn　remiem
私 NOM+SUF(PROG)　rahim ACC　走る INF　rmeyn PRES.1SG
「私はラヒームを走らせる」

ただし，使役動詞をもつ自動詞では，上の派生使役動詞をもたない自動詞とは異なり，使役表示の選択肢に形態的・迂言的の二手段があるため，被使役者(X1)の主体性によって，使役表現の使い分けが行われる。この種の自動詞では，不定詞＋rmeyn による迂言的使役文では被使役者(X1)の意志性・主体性に顧慮がおかれ，形態的使役文を用いる場合は被使役者の意志性が弱い（つまり顧慮しない）場合に使い分けられる。

23) maẓe　qorbon　ruxʉpn　remet
私 ERG　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ OBL2　眠る INF　rmeyn PAST.ST

24) maẓe　qorbon　ruxpovd
私 ERG　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ OBL2　眠る CAUS.PAST.ST

上の二文は，いずれも「私はゴルバーンを眠らせた」の意味であるが，迂言的使役表現 23)は「私はゴルバーンを無理に眠らせた」または「私はゴルバーンが眠るのを許可した」となり，眠ることになった理由（強要・許可等）はさておき，ゴルバーン（＝被使役者）が主体的に動作を行うのに対し，使役派生接辞による形態的使役文 24)は「私は（子守歌を歌って，またはあやしているうちに）ゴルバーンを眠りにつかせた」という，本来の causative に近いニュアンスで用いられている。言い換えれば，不定詞＋rmeyn は直接使役，使役派生接辞によるものは間接使役の色合いが強いということも可能であろう。

この理由から，例えば「日光で杏が熟した」では，使役動詞を用いた

25) yire　čwan　pečovd
太陽 ERG　杏 OBL2　熟す CAUS.PAST.ST

は可能だが，迂言的使役表現による

26) *yire　čwan　pečn　remet
太陽 ERG　杏 OBL2　熟す INF　rmeyn PAST.ST

は，非文ではないものの，被使役者（＝杏）が無生物で主体的に熟すことができないため，実際には用いられない。

同様に，

「私はパイロットにその飛行機を飛ばせた」

27) maẓe ʦ payloten ya jəhoz gizovd　（形態的使役文）

28) *maẓe ʦ payloten ya jəhoz gizn remet（迂言的使役文）

は，飛行機が意志的に飛行しないため，迂言的表現による使役文は非文ではないが奇妙な文となる。

2.1.3. 奪格による使役仲介者の付加と使役派生接辞-ʉv の挿入

ところで，上記のように，自動詞による迂言的使役文では，形態的使役文の場合と同様に使役仲介者(X1)は奪格で表示される。この文は，「A が X2 をして X1 がVするよう導く」となり，埋め込まれる不定詞の動作主体（つまり非使役動詞の主体）は被使役者(X1)であるため，不定詞は自動詞のままで問題ない。

しかしながら，使役派生が可能な自動詞の迂言的使役文では，奪格の添加により使役仲介者(X2)が明示された場合，埋め込まれる不定詞部分の自動詞に，さらに使役派生接辞-ʉv が付加されることがある。

「私はムラードをしてラヒームを笑わせた」

29) maẓe ʦ muraden rahim kndak remet
私 ERG ～から PREP ﾑﾗｰﾄﾞ ABL ﾗﾋｰﾑ OBL2 笑う INF rmeyn PAST.ST

30) maẓe ʦ muraden rahim <u>kandʉvn</u> remet
私 ERG ～から PREP ﾑﾗｰﾄﾞ ABL ﾗﾋｰﾑ OBL2 笑う CAUS.INF rmeyn PAST.ST

この二文が表す意味は同じであるが，文法的に正しい自動詞の不定詞を用いた 29)よりも，本来は必要ない使役派生接辞をもつ 30)の方がより良いと判断される。

類似の例をあげる。

31) towe ya yiδesn ɣirovda?
君 ERG あの 小麦の束 OBL2 裏返る CAUS.PAST.ST+SUF(INTEROG)

32) ney, maẓe muraden <u>ɣirʉvn</u> remet
いいえ 私 ERG ﾑﾗｰﾄﾞ ABL 裏返る CAUS.INF rmeyn PAST.ST
「君は小麦の束を（乾燥のために）ひっくり返したかい？」
「いや，ムラードにひっくり返してもらったよ」

32)の-ʉv の有無については，インフォーマントによって判断が分かれる。このように，用いられる動詞によって派生接辞の挿入にはゆれが見られるが，奪格による使役仲介者(X2)項が明示された場合は，本来余剰の-ʉv による使役動詞を用いた文が好まれる傾向にある。この文では奪格による使役仲介者(X2)の存在に影響を受けて，形態的使役文との混乱が生じ，-ʉv が過多に接続されたと解釈することが可能である。

2.2. 他動詞＋rmeyn

2.2.1. 使役動詞をもたない他動詞

非使役文（通常の他動詞文）の直接目的語は使役文でもそのまま保たれる。奪格は被使役者(X1)を表すが，省略は可。

33) maẓe　ʦ　rahimen　ya　guṣt　ptsak　remet
私 ERG 〜から PREP ﾗﾋｰﾑ ABL その　肉 OBL2 料理する INF　rmeyn PAST.ST
「私はラヒームにその肉を料理させた」

34) maẓe　ya　guṣt　ptsak　remet
私 ERG　その　肉 OBL2 料理する INF rmeyn PAST.ST
「私は（誰かに）その肉を料理させた」

2.2.2. 使役動詞をもつ他動詞

基本的な構造は使役動詞をもたない他動詞と同様で，奪格は被使役者(X1)を表し，奪格が省略された場合でも，被使役者の存在を予測する。

35) maẓe　ʦamen　darxost　nivišn　remet
私 ERG これ ABL　申請書 OBL2書く INF　rmeyn PAST.ST
「私はこの人に申請書を書かせた」

36) maẓe　ya　x̌ʉynanen　ya　δus　mənḍak　remet
私 ERG　その 女性 PL.ABL　その　パン種　OBL2 書く INF　rmeyn PAST.ST
「私は女性達にそのパン種をこねさせた」

なお，形態的使役文で使役動詞・他動詞両方意味を有する他動詞（1.2.4.）は，迂言的使役文では他動詞自体の機能はなく，すべて「A が X1 に O を V させる」という使役の意味を表し「A が O を V させる」の意味は表さない。下の文は，形態的使役文の場合とは異なり，奪格を伴わない場合でも，「私は自分の子供を（誰かに）清めさせた」と，常に被使役者(X1)の存在を含意する。

37) maẓe　x̌e　zman　xalifaen　ptex̌ʉvn　remet
私 ERG 自分 GEN 赤ん坊 OBL2 聖職者 ABL 清める CAUS.INF rmeyn PAST.ST
「私は自分の子供を聖職者に清めさせた」(cf.18),19)）

2.2.3. 使役動詞で与格をとるもの（受益動詞）

受益動詞については，形態的使役文では被使役者は与格をとることを示したが，rmeyn による迂言的使役表現では，被使役者(X1)は与格でなく直接目的語位置に立つ。

38) wuz-eš　qorbone　yem biskoṭ(e) yitn　remiem
私+SUF(PROG) ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ACC このﾋﾞｽｹｯﾄ 食べる INF rmeyn PRES.1SG
「私はゴルバーンにこのビスケットを食べさせる」

この使役文でも奪格によって使役仲介者(X2)を添えることが可能だが，この場合は被使役者位置に与格が復活する。対格（過去時制では斜格 2）を用いた文は非文となる。

39) wuz　rahimen　ferasater　ya　şapik　yitn　remiem
私　ﾗﾋｰﾑ ABL　ﾌｪﾗｰｻﾄ DAT　その　食事　食べる INF rmeyn PRES.1SG.
「私はラヒームをしてフェラーサトにご飯を食べさせる」

この場合, 38)では, ゴジャール・ワヒー語では通常許容されない二重目的語をとることになり，通常の使役化プロスからは外れることになる。このため，この使役文における被使役者がどの位置に入っているのかを確認するために，38)を過去形に変えてみる。

38a) maže　qorbon　yem　biskoṭ　yitn　remet
私 ERG ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ OBL2 この ﾋﾞｽｹｯﾄ 食べる INF rmeyn PAST.ST
「私はゴルバーンにビスケットを食べさせた」

能格構文をとる過去時制では，被使役者（＝ゴルバーン）は，斜格 II（＝過去時制における他動詞の論理的目的語）をとっており，被使役者がこの使役文において直接目的語の位置に入っていることが分かる。次に，yem biskoṭの文中での位置を確かめるために，qorbon と入れ換えてみる[38b)*wuzeš yem biskoṭ(e) qorbon(e) yitn remiyem.]。この場合，38b)は「ビスケットがゴルバーンを食べる」となってしまうため，入れ替えは不可であることが分かる。従ってこの文では，yitn「食べる」は前置される要素との結合度が高く，全体が名詞句として機能している可能性がある[11)]。ただしこの解釈の場合，使役仲介者の表示されない受益動詞の迂言的使役文のみが異なる使役化過程をとることになり，使役構文上の統一性の面から見て奇異な印象が残る。

一方，38)では biskoṭの語尾にはかなり自由な-e の出入り（biskoṭ/biskoṭe）が観察される。-e には対格（定の事物），属格，斜格の可能性があるが，前に指示形容詞 yem がある点と文中の位置から見て，-e を定の事物を表す対格語尾と考えた場合， yem biskoṭは定の直接目的語となり，yitn との結合度が低くなる。しかし，この場合には二重目的語を容認することが前提となる。

このように，受益動詞における被動作者の扱いには，どちらの解釈をとっても問題が残る。そもそもこの使役文の構造を正確に把握するためには，格語尾-e の有無を明確にする必要があ

るのだが，ゴジャール・ワヒー語における語尾-e のゆれは，能格語尾(-e)および斜格語尾(-e)を含め，頻繁に観察されている現象であり[12)]，-e の有無を確定することは，規範文法をもたないゴジャール・ワヒー語では至難の業と言わざるを得ない。このため，ここでは，二重目的語の容認や複合動詞に関する精査の必要性と，暫定的な解釈の可能性を提示しておくにとどめる。

2.2.4. 奪格による使役仲介者の付加と使役派生接辞-ʉv の挿入

上の 37)でも確認できるが，自動詞文と同様に，他動詞を用いた迂言的使役文でも，使役動詞をもつ他動詞で，埋め込まれる不定詞部分に本来不要な使役派生接辞-ʉv の挿入が認められる。ただし，その有意義性には，一般の使役動詞と受益動詞との間で差異が認められる。

まず，受益動詞以外の他動詞による迂言的使役文では，接辞の有無は単なる余剰であった自動詞の場合とは対照的に，不定詞部分に挿入される-ʉv の有無によって文意が変化する。

40) maẓe　rahimen　ya　čil　nimiln　remet
私 ERG ﾗﾋｰﾑ ABL　その　布 OBL2　かがり縫いする INF　rmeyn PAST.ST
「私は ラヒームに布の端のかがり縫いをさせた・してもらった」

41) maẓe　rahimen　ya　čil　<u>nimilʉvn</u>　remet
私 ERG ﾗﾋｰﾑ ABL　その　布 OBL2　かがり縫いする CAUS.INF　rmeyn PAST.ST
「私は ラヒームをして（誰か別の人物に）布の端のかがり縫いをさせた・してもらった）」

41)では，文中では明示されないが，不定詞の動作主（＝縫う人）は奪格で示された被使役者(X1)でなく，さらに別の人物(X2)であることを示している。ここでは，自動詞文の場合とは異なり，本来不要なはずの使役接辞が弁別性に関与していることがわかる。

次に，受益動詞でも，不定詞部分に使役派生接辞が付加される場合がある。

42) wuz　rahimen　ferasater　šapik　<u>yiwʉvn</u>　remiem
私 NOM ﾗﾋｰﾑ ABL ﾌｪﾗｰｻﾄ DAT　食事　食べる CAUS.INF　rmeyn.PRES.1SG
「私はラヒームをしてフェラーサトにご飯を食べさせる」

43) maẓe　qorbonen　ferasater　koṭ　<u>pemtsʉvn</u>　remet
私 ERG ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ABL　ﾌｪﾗｰｻﾄ DAT　コート ACC　着る CAUS.INF rmeyn.PAST.ST
「私はゴルバーンをしてフェラーサトにコートを着させた」

この文では，接辞の付加が有効であった他動詞の場合とは異なり，接辞の有無は文意の変化に関わらない。つまり，受益動詞の迂言的使役文に挿入される使役接辞は，自動詞による使役文で用いられる場合と同じ振る舞いをすることになる。

2.3. 迂言的使役表現：まとめ

迂言的使役文でも，自動詞の動作主は使役文では直接目的語に降格し，ここに新たな使役者項が加わる過程は，形態的使役表現と同様である。1.3.で示した項階層［主語＞直接目的語＞斜格目的語（与格・属格）の階層に従い，迂言的使役表現でも，使役者項の付加にともなう降格の手続きが行われる。ここでも，通常の非使役文からの使役化プロセスの点から，迂言的使役文の構造について詳しく見てみることにする。

1)自動詞

形態的使役文と同様に，自動詞の主体が使役文では直接目的語に降格し，新たな使役者項(A)が入る。

rahim　zʉmbʉyd

ﾗﾋｰﾑ NOM　あくびをする PRES.3SG

「ラヒームはあくびをする」

→ qorbon　rahime　zʉmbʉyn　remit

ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ NOM ﾗﾋｰﾑ ACC　あくびをする INF　rmeyn PRES.3SG

「ゴルバーンはラヒームにあくびさせる」

使役仲介者項(X1)を増やす場合には，使役文に直接目的語がすでに存在するため，さらに降格して奪格によって表す。

wuz　qorbonen　rahime　zʉmbʉyn　remiem

私 NOM　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ABL　ﾗﾋｰﾑ ACC　あくびをする INF　rmeyn PRES.1SG

「私はゴルバーンをしてラヒームにあくびさせる」

2) 他動詞

形態的手段と同様に，使役文では直接目的語(O)の保持と新たな使役者項(A)の添加，それに伴う他動詞の主語（=被使役者）の降格が行われる。使役文ではすでに他動詞の直接目的語があるため，被使役者(X1)はさらに降格されて奪格で表される。

rahim　darxost　nivišt

ﾗﾋｰﾑ NOM　申請書 ACC　書く PRES.3SG

「ラヒームが申請書を書く」

→ wuz　rahimen　darxost　nivišn　remiem

私 NOM　ﾗﾋｰﾑ ABL　申請書 ACC　書く INF　rmeyn PRES.1SG

「私はラヒームに申請書を書かせる」

受益動詞では，形態的使役文と迂言的使役文で異なる格構造にたつ。すなわち，被使役者(X1)は形態的用法における与格でなく，対格をとる。奪格は使役仲介者(X2)を表示し，この場合は与格が復活する。この種の使役文における二重対格の出現は項要素の階層性に適合しないが，この文の構造を解明するためには，さらに格語尾の確定等の作業を行う必要があるため，今後の研究課題としたい。

rahim　yupk　pit「ラヒームは水を飲む」
ﾗﾋｰﾑ NOM　水 ACC　飲む PRES.3SG
→ wuz　rahime　yupk　pitn　remiem
私 NOM　ﾗﾋｰﾑ ACC　水 ACC?　飲む INF　rmeyn PRES.1SG
「私はラヒームに水を飲ませる」
→ wuz　qorbonen　rahimer　yupk　pitn　remiem
私 NOM　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ABL　ﾗﾋｰﾑ DAT　水 ACC　飲む INF　rmeyn PRES.1SG
「私はゴルバーンをしてラヒームに水を飲ませる」

3）使役派生接辞の挿入とその機能

上述のように，迂言的使役表現では，不定詞の位置に使役派生接辞-ʉv の出入りが見受けられ，使役文によってその機能に違いが生じることが確認されている。すなわち，-ʉv は，自動詞および受益動詞による迂言的使役文に挿入された場合は，接尾辞によって文意は変わることはなく，この挿入は余剰となる。一方で，他動詞の迂言的使役文では，使役接辞の有無により文意が変わり，接辞が付加される場合は，文中には明示されない使役仲介者(X2)が使役文の外側に存在することを示し，付加されない場合は被使役者(X1)が不定詞の動作主となることを含意する。このような，本来の使役化手続きを経ていないにも拘わらず，新たな項の表示がこの使役文でのみ可能となる理由は，以下のように説明できる。

a. wuz　ya　čil　nimilem
私 NOM　その　布 ACC　かがり縫いする PRES.1SG
「私はその布のかがり縫いをする」
→ b. wuz　rahimen　ya čil　<u>nimiln</u>　remiem
私 NOM　ﾗﾋｰﾑ ABL　その布 ACC　かがり縫いする INF rmeyn PRES.1SG
「私はラヒームにその布をかがり縫いさせた」
c. wuz　rahimen　ya čil　<u>nimilʉvn</u>　remien
私 NOM ﾗﾋｰﾑ ABL その布 ACC　かがり縫いする CAUS.INF　rmeyn-
PRES.1SG

「私はラヒームをして（誰か他の人に）その布をかがり縫いさせた」

この時，迂言的使役文の b.では使役者仲介者(X1)のスロットが空いている。しかしながら，この位置に当てはめられる項要素は，階層の最下層にある属格が既に被使役者(X1)を表示しているため，使用可能な要素は残っていない。このため，本来はこれ以上の項の追加はできない。しかし，nimiln は使役動詞 nimiluvn をもつため，使役派生接辞を追加することによって，さらに新たな項(X2)の存在を表すことは可能となる。ただし，実際に使用できる項要素は残されていないため，この X2 は文中では実際に現れることはなく，使役文の外側に明示されない X2 が存在することのみを含意することになる。実際に仲介者を提示するためには，補文や前置詞句など，階層外にある付加詞が必要となる。こうした使役派生接辞の用法は，本来の他動詞文→使役文の変形手続きからは外れているが，使役派生接辞-uv の増項機能を利用した，いわばオプションの方法ということができる。

さらに，これを 2.1.3.と 2.2.4.で述べた，自動詞と受益動詞の迂言的使役表現で観察される，同様の接辞付加のケースと比較してみる。ここでは使役接辞の有無によって文意が変わることはなく，動詞によって混乱が生じている。

wuz　qorbonen　rahime　<u>ruxupn</u>　remiem

私 NOM　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ABLﾗﾋｰﾑ ACC　眠る INF　rmeyn.PRES.1SG

「私はゴルバーンをしてラヒームを眠らせる」

wuz　qorbonen　rahime　<u>ruxupuvn</u>　remiem

私 NOM　ｺﾞﾙﾊﾞｰﾝ ABLﾗﾋｰﾑ ACC 眠る CAUS.INF rmeyn.PRES.1SG

「私はゴルバーンをしてラヒームを眠らせる」

この例も，使役接辞-uv の増項機能が影響し，本来は不必要な使役接辞が付加されたため，混乱を引き起こしている。しかしながら，上の例と異なるのは，これらの文では，使役文で表せる最大限度の参与者要素である使役仲介者(X2)が，すでに奪格で表されている点である。つまり使役文で要求される参与者スロットは，全て正しい項要素によって埋められており，これ以上の参与者を増やす余地はない。結果として，この文で挿入される使役接辞は，文意の変化には関わらず，単に余剰な用法となり，使役性の補強のように用いられることとなる。

結び

使役表現は，想定される使役参与者の位置に，適当と考えられる項要素を当てはめていくことで実現されると考える。ゴジャール・ワヒー語の使役表現では，使役者(A)，被使役者(X1)，目的語(O)，使役の仲介者(X2)までが使役文に関与するため，この４要素を参与者要素とすることができ，使役文では最大で４つの参与者スロットが想定される。実際に使役文を作る際には，

各々の参与者位置に，適宜項要素を入れていくことになる。当てはめられる項要素は，主語＞直接目的語＞斜格目的語（与格または奪格）の階層を成しており，要素が選択される際は，上の階層（左側）から，まだ使われていないものを採用する。なお，言語類型論では，この階層は主に被使役者が現される項要素との関連から説明されるが，ここではもう少し拡大して，形態的使役文・迂言的使役文両方の使役化プロセスに関わる要素の確定についても，結合価階層の関連性を用いて説明することができる。

以下に，使役参与者と項要素の関連性から，これまで述べてきた使役文について，各々のタイプの使役文で想定される参与者要素とその位置に適用される項をまとめてみる。下では，使役者=A，被使役者=X1，目的語=O，使役仲介者=X2 で示した参与者要素の右側に，項要素を実際の実現形式を添える形で示す。使役文タイプの a.は使役仲介者なし，b.は使役仲介者が明示される文である。また，Vcaus は使役派生接辞が付加された動詞を表す。なお，ゴジャール・ワヒー語では主語と直接目的語が実現される格の形式が現在時制と過去時制で異なるため，ここでは現在時制の例で提示する。

(1) 自動詞

□形態的使役文

a. Anom　　X1acc　Vcaus

b. Anom　X2abl　X1acc　Vcaus

□迂言的使役文（V=inf, Vcaus は使役動詞をもつ動詞のみ)

a. Anom　　X1acc　V　rmeyn

b. Anom　X2abl　X1acc　V　rmeyn

or　b. Anom　X2abl　X1acc　V<u>caus</u>　rmeyn

→Vcaus は余剰。参与者スロットと項要素は残っていないため，V/Vcaus によって文意は変わらない。Vcaus は単に補強となる。

(2)他動詞

□形態的使役文

a. Anom　　X1abl　Oacc　V　「A が X1 に O を V させる」

b.* Anom　X2　X1abl　Oacc　Vcaus　「A が X2 をして X1 に O を V させる」

→b.は使役文では表せない構造。参与者位置は想定できるが，X2 に入るべき項要素が残されていないため，通常の使役文では表せない。X2 が必要な場合は付加詞等で表す。

□迂言的使役文（V=inf, Vcaus は使役動詞をもつ動詞のみ)

a. Anom　　X1abl　Oacc　V　rmeyn

b. Anom　X2　X1abl　Oacc　Vcaus　rmeyn

(↑Vcaus)

→X2 要素のみ空いているが，項要素は使い切ったため，実現はされない（付加詞が必要）。しかし使役派生接辞の付加が可能な動詞では，V に替えて Vcaus を置くことにより，X2 の存在を含意することが可能。このため，使役派生接辞の有無によって文意に差異が生じる。

(2a)受益動詞

□形態的使役文

a. Anom　　X1dat　Oacc　Vcaus

b. Anom　X2abl　X1dat　Oacc　Vcaus

→この文は通常の他動詞派生使役文では表すことができない。受益動詞では X1 部分に dat が入るため，X2 部分に残った abl を入れることが可能。

□迂言的使役文（V=inf, Vcaus は使役動詞をもつ動詞のみ)

a. Anom　X1acc　Oacc　V　rmeyn

＊ここで X1 が ACC で実現される理由は今後の検討課題。

b. Anom　X2ABL　X1dat　Oacc　V　rmeyn

or　b. Anom　X2ABL　X1dat　Oacc　Vcaus　rmeyn

→自動詞の場合と同様に Vcaus は余剰。参与者スロットと項要素は残っていないため，V/Vcaus によって文意は変わらない。Vcaus は単に補強となる。

(2b)例外：3 項動詞

□形態的使役文

cf.　S　O'dat　Oacc　V（参考のために非使役文をあげておく）

→　a. Anom　X1abl　O'dat　Oacc　V　rmeyn

→被使役文の間接目的語が使役文でも保持されるので，受益動詞の使役化プロセスとは異なる。

□迂言的使役文（V=inf)

b. Anom　X1abl　O'dat　Oacc　V　rmeyn

以上，ゴジャール・ワヒー語の使役文について，その構造と使用現状を概観し，実用上の問題点について，使役化メカニズムの観点から考察してきた。同言語では，被使役者と使役仲介者の表示される形式が使役文タイプによって異なり，用法上の複雑さを引き起こしていることは，冒頭で示した問題点 1)の通りである。この理由は，概ね以下のように説明される。

上で示した使役化プロセスのように，ゴジャール・ワヒー語の使役文では，非使役文におけ

る直接目的語は使役文で直接目的語のまま保持され，被使役者(X1)の実現形式は項要素の階層に従って決定される。このため，元となる非使役文が自動詞か，あるいは直接目的語をもつ他動詞であるかによって，被使役者が表される段階にずれが生じることになる。ゴジャール・ワヒー語では，使役仲介者までが使役参与者要素に含まれるため，このずれは，被使役者に続いて決定される使役仲介者の形式にも及ぶ。結果として，使役文のタイプによって，まず，他動詞文と自動詞文では，被使役者，使役仲介者の表示形式が各々異なることになる。

これに加えて，他動詞文のうち受益動詞では，被使役者が，斜格目的語で一般的に用いられる属格でなく，受益性に関連の深い与格で表される。斜格目的語内では与格と属格に階層性はなく，受益動詞では例外的に異なる格であれば共起を認めるため，実現される結合価の選択肢が一つ多くなる。つまり，同じ他動詞文内でも，一般の他動詞と受益動詞では，被使役者，使役仲介者の表示形式が異なることになる。

また，繰り返しになるが，これらの使役文は，分裂能格の関係から，現在時制で主格，対格で実現される要素は過去時制ではそれぞれ能格, 斜格 2 に立つため, すべての使役文において，現在時制と過去時制では異なる格表示形式をとることになる（属格と与格は時制には関わらない)。

次に, 冒頭 2)で示した問題点―迂言的使役構文における使役派生接辞-ʉv の余剰な挿入と有意義性に見られる差異―は，奪格によって使役仲介者が添加される場合に見られる現象で，奪格に-ʉv がもつ狭義の使役の意味「～させる」に引っ張られる形で挿入されたものと考えられる。この接辞が使役文タイプによって意味の弁別性に関与する場合としない場合があるのは，挿入される使役文の構造が異なるためである。つまり，参与者スロットと項要素の関連から，接辞によってその使役文にまだ変化を加えられる余地が残っている場合は有意義に働き，そうでなければ，接辞を付加しても単なる余剰として補強の役割をもつに過ぎないということになる。

なお，2 点説明できない問題が残った。形態的使役では，一部の他動詞派生の使役動詞が，使役に加えて派生元の他動詞と同じ機能をもつものが確認された点，それに，受益動詞の迂言的使役文にみられる構造解釈上の問題点である。１点目は非常に興味深い現象であるが，構造上や使役化プロセスでなく，意味的観点からの考察を必要とすることが予想されるため，今回の分析対象とはしなかった。２点目については，格語尾-e の出入り，本稿では扱わなかった複合動詞の問題など，より広い視点を加えて分析する必要があるため，今後あらためて考察するべき課題と考えている。

＜略語＞

ABL	奪格	PAST	過去
ACC	対格	PL	複数
DAT	与格	PREP	前置詞
GEN	属格	PRES	現在
INF	不定詞	PROG	進行形
INTEROG	疑問	SG	単数
IMPR	命令	SUF	接尾辞
NOM	主格	ST	語幹
OBL	斜格		

注

1) 本稿は，平成 24 年度文部科学省科学研究費「ゴジャール・ワヒー語辞書の編纂とデータベース構築」（課題番号 24520456）による調査研究成果の一部である。

2) ゴジャール・ワヒー語は，イラン語派東イラン語に属する言語で，アフガニスタン（バダフシャン州ワハン回廊地域），タジキスタン（ゴルノ・バダフシャン州），パキスタン（ギルギット・バルティスタン州上部フンザ・ゴジャール地域），中国（新疆ウイグル自治区）の 4 カ国にまたがって分布する。タジキスタンの公用語であるペルシア語の影響を強く受けているタジク・ワヒー語とパキスタンに分布するゴジャール・ワヒー語では，少なからずの文法上の差異があることが確認されている。詳しくは Yoshie(2005b), 吉枝(2008)を参照。

3) 現代イラン語で最も広く認められる使役派生接辞は-ān である。[ex.ペルシア語 res- 「着く」> resān-「着かせる，送る」 xor-「食べる」 > xorān-「食べさせる」/ クルド語-ēn/ān / バルーチ語-ēn ＜cf.中期ペルシア語-ēn]。-uv 系列の使役派生接辞については西イラン語には報告例はないが，東イラン語についてはしばしば言及がみられる［ex.パラ―チー語-ēw／ソグド語-āw, Gershevitch1961 :§546 を参照のこと］。なお，古代期の使役派生接辞には，-aya-があげられる［ex.アヴェスター語 √tap 'to warm, to be warm' > pres.st. tāpaya- 'to make warm' etc.］
現代ペルシア語では，使役接辞-ān を動詞の現在語幹に付加した形態的使役文（強制使役が多い）と，助動詞 gozāštan「～させる」（許可使役）を用いた婉曲的表現による使役表現が可能である。［in matlab rā be u fahmāndam.「私はこのことを彼に分からせた」］ただし，接尾辞による使役動詞の使用は，かなり限られた動詞のみにみられる。特に強制使役に関しては，majbur kardan「余儀なく～させる」等の補文を用いた表現が一般的となっている。

4) 古代イラン語 fra-√mā-［古代ペルシア語 fra-√mā-「命じる，アヴェスター語 frā-√mā(y)-「命じる」］に関連をもつと考えられる（cf.中期ペルシア語 framāy-, 現代ペルシア語 farmā-「命じる」）。

5) ゴジャール・ワヒー語の過去時制では，他動詞の動作主は斜格 1，直接目的語は斜格 2 に立つ。斜格 1 は過去時制における他動詞の主語および現在時制における直接目的語を指す。斜格 2 は過去時制における他動詞の直接目的語を示す。このように，斜格 1 は能格構文における論理主語を表示するための専用格ではないので，吉枝(2009)では便宜上これらの格を斜格 1，斜格 2 と称している。ただし，ここでは，その機能の面からそれぞれ能格，対格と称する方が分かりやすいため，過去時制における他動詞の論理主語を能格(ERG),現在時制における直接目的語を対格(ACC), 過去時制における論理的目的語は, そのまま斜格 2(OBL2)としておく。ゴジャール・ワヒー語の格組織と能格構文の詳細については，吉枝(2009)を参照のこと。
なお，使役文分析では，各要素が表示される実際の形式を元に分析を行うのが一般的であるが，ゴジャール・ワヒー語では，上記のように現在時制と過去時制によって異なる格表示システムをもつため，使役文に関わる格表示を体系化することが困難な場合がある。このため，ここでは，例えば直接目的語がとる格形式（現在時制では対格，過去時制では斜格 2）は結合価の実現形と捉えることにし，例のように異なる格

形式であっても，同一の要素が具現化されたものであれば，同じ項の表示形式として考える。

6) Grünberg & Kamensky(1988)では，タジク・ワヒー語について，使役接辞(-ɯw)の説明と，接辞による使役動詞 68 例があげられている。文例は示されていない。

7) 奪格-en が使役文要素を示す場合，強調のために，動作・状態の起点を表す前置詞 ts(e)「～から」により補強された，ts+奪格の形が用いられることも多い。

8) ゴジャール・ワヒー語では，形態上は「～させる」と「～してもらう」の区別はつけられない。相手からの受益は，「親切にも」のような前置詞句等の付加詞を添えて表す。

9) 与格は，動作の方向を示す以外に，受益の方向「～のために」を示す。

10) 参考のために，このタイプに属する動詞をあげておく。（？印：インフォーマントによって判断が分かれたもの）: barsɯv-「目を閉じる」「目を閉じさせる」diyɯv-「叩く」(?)「叩かせる」drevɯv-「縫う」(?)「縫わせる」dzelɯv-「満たす，紡ぐ」「紡がせる」δitsɯv-「（乳などを）搾る」「搾らせる」dzrupɯv-「摘む，摘まむ」「摘ませる，摘まませる」feɣɯv-「鼻をかむ」「鼻をかませる」kufɯv-「傷つける」(?)「傷つけさせる luwɯv-「壁などを塗る」(?)「塗らせる」manḍɯv-「こねる」「こねさせる」marẓɯv-「困らす，邪魔する」「邪魔させる」petexɯv-「(煙の上に)かざして清める」「清めさせる」pilwišɯv-「（穀物の種子を）きれいにする」「きれいにさせる」qrapɯv-「噛む，かみ砕く」「噛ませる」reseδɯv-「切る」「切らせる」rpetsɯv- 「誤った方向に導く」「誤った方向に導かせる」sɯxɯv-「こする」「こすらせる」šapɯv-「乳をやる」「乳をやらせる」šuwɯv-「噛む，噛みつく」「噛ませる」ṣarguv-「溶かす」「溶かさせる」ṣoxɯv-「塗る」(?)「塗らせる」tənʤɯv-「引っ張る」「引っ張らせる」vdewɯv-「乗せる」「乗らせる」vrešɯv-「炙る」「炙らせる」weδvɯv-「ほどく」(?)「ほどかせる」xapɯv-「（洗濯物などを）搾る」「搾らせる」xenʤɯv-「すくう，すくい取る」「すくわせる，すくい取らせる」zmilɯv-「丸める，捲く」「丸めさせる」zulunɯv-「揺する」「揺すらせる」zhrevɯv-「捕まえる」「捕まえさせる」zhmenḍɯv-「よじる」「よじらせる」ẓeδɯv-「蒔く」「蒔かせる」。使役機能のみをもつ一般的な使役動詞との間に，今のところ意味上等の顕著な差は認められない。

11) Bashir(2009)では迂言的使役文について，目的語と不定詞部分を名詞句として捉え，maže ts towen luqpar wuzduk remet「私は君に[服を洗うこと]をさせた」という構造と説明している。

12) ゴジャール・ワヒー語の能格構文における格語尾-e の脱落とそのゆれについては，吉枝(2009)を参照。

参考文献

Backstrom, Peter C. 1992. "Wakhi" and "Appendix D Wakhi Survey Data" in Backstrom, Peter C. & Carla F. Radloff, *Sociolinguistic Survey of Northern Pakistan 2. Languages of Northern Areas*, National Institute of Pakistan Studies, Quaid-e-Azam University/Summer Institute of Linguistics, Islamabad, pp.57-74 and pp.273-92.

Bashir, E. 2009. "Wakhi " in Windfuhr.G ed. *The Iranian Languages*, pp.825-59.Routledge.

Comrie,B. 1981,1989. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*.

『言語普遍性と言語類型論』（松本克己・山本秀樹訳）ひつじ書房 1992 年 .

Gershevitch, I. 1961. *A Grammar of Manichean Sogdian*. Basil Backwell, Oxford.

Golfam, A. and M.Dehghan, 2012. "'On Type: The So-called Causativization in Persian", *Theory and Practice in Language Studies*, Vol.2.No.7, pp.1634-43. Academy Publisher.

Dixon,R.M.W. and A.Aikhnvald 2010. *Changing Valency*. Cmbridge University Press.

Grünberg, A.L. & I.M. Steblin-Kamensky. 1988. *La langue Wakhi, Essai grammatical et dictionnaire wakhi-français*, édité et traduit par Dominique Indjoudjian, suivi de *Dictionnaire français-wakhi* établi par Larissa Kydyrbaiéva, Maison des Sciences de l'Homme, Paris [original Russian edition 1976]

Kent, R.G. 1953. *Old Persian*. American Oriental Society, New Haven.

Lorimer, D.L.R. 1958. *The Wakhi Language*, I. *Introduction, Phonetics, Grammar and Texts*, II. *Vocabulary and Index*, School of Oriental and African Studies, University of London.

（私家版；本書は SOAS の Nicholas Sims-Williams 教授より，2005 年 6 月に恵与されたものである．同教授のご厚意に感謝する）

Lotfi, A. R., 2008. "Causative Constructions in Modern Persian", *California Linguistic Notes*, Vol.33/2. California State University.

Morgenstierne, Georg. 1938. "Wakhi" in Morgenstierne, Georg. *Indo-Iranian Frontier Languages*, Second Edition, *Revised and with New Material*, vol. 2 *Iranian Pamir Languages -- Yidgha-Munji, Sanglechi-Ishkashmi and Wakhi*, Institute for Sammenlignende Kulturforskning, Universitetsforlaget, Oslo/Bergen/Tromsöe.

Pahalina, T.N. 1975. *Vahanski jazyk*, Moskva .

Payne, John 1980. “The Decay of Ergativity in Pamir Languages”, *Lingua* 51, pp.147-86.

—— 1989. "Pamir Languages", in Rüdiger Schmitt (ed.) *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden 1989,pp.417-44.

Reinhold, Beate 2006. *Neue Entwicklungen in der Wakhi-Sprache von Gojal (Nordpakistan)*, Harrasowitz Verlag, Wiesbaden.

Schmitt,R. 1989 *Compendium Linguarum Iranicarum*, DrLudwig Reichert Verlag, Wiesbaden.

Shibatani.M ed.2002. *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*. John Benjamins Publishing Company.

Windfuhr, G. ed. 2009. *The Iranian Languages*. Routledge.

Yoshie, Satoko 2005a "The Sound System of Gojal Wakhi",『東京外国語大学論集』71, 東京外国語大学 , pp.43-82.

—— 2005b “Gojal Wakhi Basic Vocabulary”『言語情報学研究報告』No.8, 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学 , pp.401-77.

吉枝聡子 2007「ワヒー語婚礼歌 Sinisay」『東京外国語大学語学研究所論集』東京外国語大学語学研究所 , pp.101-18.

—— 2008「ゴジャール・ワヒー語の動詞体系」『東京外国語大学論集』76, 東京外国語大学 , pp.35-62.

—— 2009「ゴジャール・ワヒー語の能格構文」『東京外国語大学論集』78, 東京外国語大学 , pp.273-88.

ワヒー語サイト：http://www.coelangtufs.ac.jp/multilingual_corpus/wakhi/

［東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム言語運用を基盤とする言語情報学拠点・少数言語コーパス］

The Causative Construction of Gojal Wakhi

YOSHIE Satoko

Gojal Wakhi has two causative constructions – morphological causative and periphrastic causative. The morphological causative is marked by the causative suffix -ʉv and the periphrastic one is expressed by verbal infinitive with auxiliary verb rmeyn ‘to make, let’. In Gojal Wakhi, the causer, the causee, the direct object and the 'mediator causer' can be shown in a causative sentence without adding phrases or clauses. This abundance of the causative participants sometimes causes the complexity or confusion in its use.

This paper aims to provide the basic structure of the causatives and demonstrate the causation mechanism in Gojal Wakhi. The most fundamental rules on the causation are as follows: in the causative of transitive verbs, the original object of the underlying sentence stays as the object in the causative sentence and the original agent moves to the first empty slot on the hierarchy of the arguments. This construction is to be classified under type v) which Dixon (2000) defines. The hierarchy of the valency in Gojal Wakhi could be established as : subject > direct object > oblique object. The oblique object contains the ablative which is most widely used, and the dative, the use of which is restricted to the 'beneficial' verbs such as *yiwʉv*-'to feed', *pevʉv*- 'to make / let drink'. The mediator causer is fixed again according to the above hierarchy.

ex.	*wuz*	*rahimen*	*qorboner*	*ṣapik*	*yiwvem*.
	I-NOM	ABL	DAT	mealACC	eat CAUS.PRES.1SG

'I make Qorban eat the meal through Rahim'

The discussion on the causation process could help one to provide a solution for problems in usage of the causatives. For example, the causative suffix *–ʉv* is sometimes redundantly added to the verbal infinitive in the periphrastic causative.

ex.	A	*maẓe anitaen ya zav gizn remet* /	A'	*maẓe anitaen ya zav <u>gizʉvn</u> remet*
	B	*maẓe rahimen ya čil nimiln remet* /	B'	*maẓe rahimen ya čil <u>nimilʉvn</u> remet*

A/B are the correct sentences and the redundant causative suffix *-ʉv* is added in A'/B'. Despite the two sentence pairs have the same suffixation patterns, B and B' sentences show different meanings – 'I made Rahim hem the cloth' (B) and 'I made someone hem the cloth through Rahim' (B'), while A/A' show no difference in the sense 'I made Anita wake the baby up'. One may explain this morphosemantic problem through the relation of the participant and the argument. In A/A' pair, all participant slots are filled with

the 'correct' arguments according to the hierarchy. On the contrary, the slot for the mediator in B is still unoccupied but no argument remains unused (cf.rahimen in ablative). In this case the 'redundant' causative suffix can be added (B') to imply that the action is completed through the third person (= mediator). It can be called the 'optional' usage of *-ʉv*.